

地方都市における名門高等女学校の記憶

— 卒業生調査の分析から —

土田 陽子 (京都大学大学院)

1. はじめに

戦前期の和歌山市内には、1881(明治 24)年に設立された名門校である県立和歌山高等女学校(通称<和高女>)、1912(大正元)年設立の裁縫女学校を母体とし、実科高女を経て高女となった<市立高女>、1923(大正12)年に入学難緩和のために設立された仏教系<私立高女>の3校が存在していた。

昨年度は、社会のまなざしという視点から「大阪朝日新聞 和歌山版」を分析し、新聞紙上に構築された3校の女学生像の分析を行った。本研究では、実際に<和高女>で教育を受けた卒業生を対象とし、母校についての「集合的記憶」(アルヴァックス 訳書 1989)を分析することを目的とする。

具体的には、「進学理由」「学校が力を入れていた教科」「女学生イメージ」について、「出身小学校」「出身階層」「卒業年度」といった属性との関係の中から見ていきたい。

2. 分析資料

2004年4月、<和高女>の同窓会組織である「桜映会」の100周年記念総会への出席者730名に、返送用封筒を同封した調査表を配布した。その後5月～7月にかけて追加調査として、昭和17年度卒業生のクラス会で出席者59名、桜映会幹部役員会で16名に配布。さらに、名簿を入手できた昭和14年度、昭和21年度、昭和23年度を対象に無作為抽出で各100部ずつ郵送した。返送数は410部であり、回収率は37.1%であった。

また、3年前から始めたインタビュー調査については、現在までに20名終えている。

3. 分析結果

(1) <和高女>卒業生の属性

最初に、<和高女>卒業生の属性について出身階層と出身小学校の関係を見ていくことにする。

旧和歌山市内の市立小学校15校のうち、新中間層率が50%を超える地域の小学校を「住宅地域小学校」、旧中間層率が70%を超える小学校を「商業地域小学校」とし、さらに「師範附属小学校」「その他・県内小学校」「その他・県外小学校」の5つに区分した。新中間層率はそれぞれ、「その他・県外小」81.0%>「附属小」64.2%>「住宅地小」54.8%>「その他・県内小」39.6%>「商業地小」20.0%となった。

父の学歴で、「高等教育」の比率は、「その他・県外」69.6%>「附属小」54.5%>「住宅地小」43.6%>「商業地小」28.3%>「その他・県内小」28.0%の順である。

母の学歴で「中等教育以上」の比率は「その他・県外」81.8%>「附属小」81.5%>住宅地」59.5%>「商業地」59.4%>「その他・県内」58.9%である。

(2) 進学理由

「小さい時から、<和高女>に行くのは当たり前でした。とにかく当たり前でした。」

(昭和17年卒)

進学理由のうち、「小さい頃から行くのが当たり前だと思っていた」の結果は、父母ともに学歴が高いほど、「とてもそう思う」率が高くなる。出身小学校では「附属小学校」が最も高い。ただし、家庭の職業が新中間層

か旧中間層かによる違いは見られなかった。

- (3) 力を入れていた教科 - 学校側と自分
「特別裁縫に力入れる学校もあったけど、
〈和高女〉はそんなことない。やっぱり
勉強やね。」 (昭和 14 年卒)

学校側が力を入れていたと思う教科は、「修身」「知識に関わる勉強」「お作法や習字など女性の嗜み」という記憶を持っている。

しかしながら、自分が力を入れていたのは「知識」「嗜み」「裁縫等の家事能力」という結果となった。

- (4) 3校の女学生イメージ

「〈和高女〉は背筋が伸びていて、歩き方からして違いました。」(昭和 11 年卒)

「〈市立〉は明るいというか、あっけらかんとしているというか・・・。」

(昭和 12 年卒)

質問紙では、伊藤 (1978) のMHFスケールの男性特性・女性特性・人間性特性の中からいくつか選び、さらに階層性や学校的価値をあらゆる性質を加えた 20 項目の特性のうち、各校生徒のイメージとして3つずつ選んでもらった (表 1 参照)。

(表 1) 3校の女学生イメージ

	和高女	市立高女	私立高女
1位	誇り高い (72.5%)	明るい (42.6%)	従順な (36.8%)
2位	頭の良い (51.2%)	健康的な (41.7%)	ひかえめな (34.3%)
3位	規律正しい (44.2%)	質実な (28.4%)	かわいい (24.9%)
4位	質実な (31.0%)	器用な (24.5%)	愛嬌のある (24.9%)
5位	真面目な (24.8%)	愛嬌のある (22.1%)	明るい (23.8%)
6位	上品な (22.4%)	気配り上手な (21.1%)	物静かな (20.4%)
7位	指導力のある (16.4%)	かわいい (15.7%)	健康的な (20.4%)

〈和高女〉の学校イメージは、「誇り高い」「上品な」といった階層性の高さや、「頭の良い」「規律正しい」「真面目な」といった学校的価値と親和性の高い特性が選ばれている。

〈市立高女〉は人間性をあらかず H 特性が多く、「愛嬌のある」「かわいい」という F スケールの女性性をあらかず特性も選ばれている。〈私立高女〉は「従順な」「かわいい」「愛嬌のある」「ひかえめな」という女性特性が多くを占めている。

では、以上のような女学生イメージは卒業生の属性集団とどのような関係があるのだろうか。まずは卒業年度との結果を見てみよう。卒業年度に関しては、太平洋戦争の影響と校長の移動時期との関係から、「戦前期 (昭和 17 年度卒業まで)」、最も動員の多かった「戦中期 (昭和 18~21 年度卒)」、戦後の教育を受けた経験をもつ「戦後期 (22 年~23 年度卒)」の 3 つの時期に分けた。

どの時期も卒業生全体がもつ女学生イメージとほぼ同様の結果を得たのだが、中には時期によってイメージに違いがあるものもある。戦前期では「質実な」が 46.7% なのに対し、戦後期では 19.8% となっており、逆に「誇り高い」や「頭の良い」は〈和高女〉としての教育をほとんど受けていない集団である戦後期の方が高くなっている。

さらに出身小学校によってもイメージに違いが見られるものもある。例えば、「規律正しい」は「住宅地域小学校」に多く、「頭の良い」は「商業地域小学校」卒業生に多く選択されていた。

4. まとめ

女学生イメージについては、新聞記事の分析とほぼ同様のイメージが確認できた。他の 2 校と比較したところ、入学難易度が下がるほど、女性性をあらかず特性が増えるということが明らかになった。

学校文化や女学生イメージと属性との関係についてのさらなる分析については、当日詳しい資料を配布する。